



あなたに
伝えたい

セクシュアリティに悩む人がいれば、それは神からの恵みで一つの個性なのだ伝えていきます。

LG B T Q (性的少数者)などへの理解は近年、深まりつつあるが、宗教の世界では性の多様性に対して今もなお厳格なとらえ方をとするケースが少なくない。クリスチャンの中村吉基さん(55)はゲイであることを告白し、牧師として活動しながら当事者たちを支えてきた。さらに、仏教などさまざまな宗教者に信仰の垣根を越えて、LG B T Qに寄り添う重要性も説いている。

(向川原悠吾)

ゲイを自覚した当時の心境は。

自分のセクシュアリティを自覚したのは高校二年くらい。同性愛は当時、「一過性の症状で治療すれば治る」と年代向けの雑誌に紹介されたり、WHO(世界保健機関)が精神疾患に分類していたりと理解が浅かった時代です。知られれば、からかわれる対象になることは分かっていたので、言ひ出せませんでした。当事者と出会うために雑誌の文通欄を使ってひっそりとやりとりをしました。が、手紙を出した相手は地元以外の人たちでした。大学を卒業して地元で教員になり、当事者向けのイベントを開くと、参加者に見覚えのある人がいて。地方は狭い。一年で耐えきれず、その後は東京の新聞社や出版社で編集の仕事に携わり、LG B T Qが集まる新宿二丁目によく足を運んでいました。地方で息を潜めているような当事者にとって、大都市のコミュニティは助けになる存在です。今はLG B T Qを扱う報道やドラマなどが増え、認知度が高まってきました。オンラインブックに向けて、当事者とともに歩んでいくとする機運も高まっています。多くの自治体でパートナーシップ条例が制定され、札幌地裁では同性婚ができることに違憲判決が出るなど、追い風になっています。これまでい

中村 吉基 ゲイを告白した牧師

とにされていたLG B T Qの存在に気付いてくれる社会になりつつあります。

牧師を目指したきっかけは。

高校一年で洗礼を受けて、クリスチャンになりました。若いころは教会に行っても富裕層やインテリのようないわゆるエリート層ばかりがいて「なぜ本当に助けてほしい人が来られないのだろう」と疑問を持っていました。二十七歳の時に旅行先のニューヨークで、エイズ(後天性免疫不全症候群)患者の葬儀やケアに積極的に取り組んでいる教会を訪れました。当時の米国はエイズに対する差別や偏見が強く、教会の信徒でも病気が発覚すれば疎外され、治療が遅れてしまう状況がありました。

エイズは同性愛者だけの病気ではないし、患者は日本にもいるので、そうした教会は必要だと思いました。エイズ患者やLG B T Qのために働くという使命を米国で感じました。帰国してから数年後の三十代で牧師になろうと神学校へ通い始めました。

卒業後は新宿二目の近くで教会を開いた。

二〇〇四年からビルの一室などを借りて教会を開設し、活動を始めた。新宿二目は日本で最大のLG B T Qの街とされ、多くの当事者がいるので、彼らに寄り添いたい一心でした。ゲイをカミングアウトし、看板に性の多様性を表すレインボーフラッグを掲げ、一八年に解散するまでに八百人ほどが訪れました。その多くが当事者だったと思います。

多かったのは牧師や教会の信者にセクシュアリティをカミングアウトしたら拒絶された、という相談。地方からやって来た同性愛

者からは、お見合いで家族に無理やり結婚させられそうという相談も寄せられました。当事者のカップルの結婚式で司会や進行役を依頼されたこともあります。



ゲイをカミングアウトしたの活動には困難もあったのでは。

聖書には「女と寝るように男と寝てはならない」と同性愛を否定しているかのように解釈される記述があります。それを根拠にして教会まで押しかけた人から「あなたは何を言っている」「罪人だ」と怒鳴られたことがありました。ネットでは私の活動を批判するクリスチャンもいました。

私は聖書は同性愛を明確に禁じてはいないという理解をしています。聖書には非常に好戦的な記述があるなど、現代で受け入れられるには難しい内容もあります。社会や時代の流れを客観的に見ながら、人を生かすために現



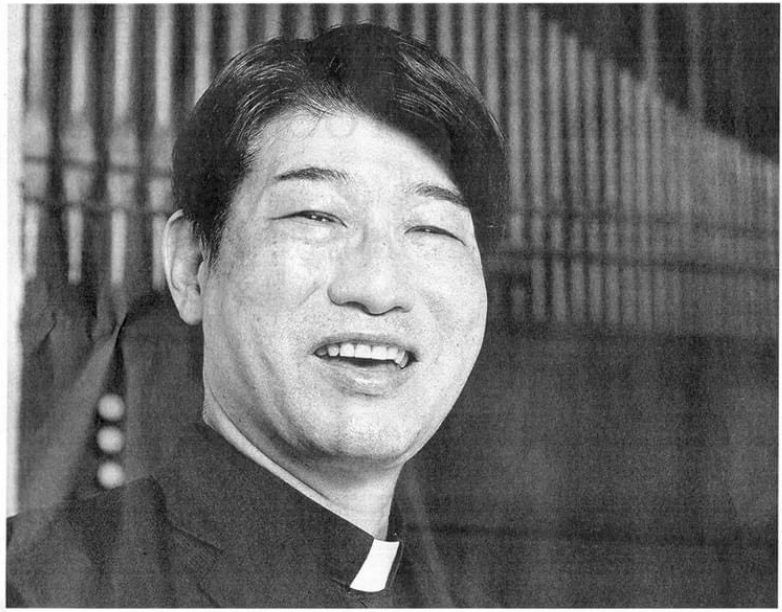
現在は宗教者向けに性の多様性についての講演などをしている。

性の多様性の理解が広まり、問題が見えてくるようになり、LG B T Qに寄り添いたいという立場をとる宗教は増えています。仏教では人が亡くなれば、多く

の宗派で男女別に戒名がつけられます。トランスジェンダーの人や男女どちらの性別でもないと感じている人が亡くなった時には、どういった戒名がふさわしいかという問題に直面しています。

当事者が亡くなった葬儀に、パートナーが親族として参列できないといった問題も起きています。トランスジェンダーの受刑者にとり寄り添えばいいのか、といった相談を教師から受けることもあり、問題はさまざまです。講演会などではいろんな宗教が抱えているセクシュアリティに関する問題を聞きながら、教義や伝統を重んじつつも、変えていく重要性と勇気を訴えています。そこを乗り越えなければ、宗教界が時代の流れに取り残されることになっていきます。

愛に区別はない 性的少数者を守る



写真・坂本亜由理

なかむら・よしき 1968年1月、金沢市出身。同市の教会で15歳の時に洗礼を受けた。大阪芸術大を卒業後は地元で教員を1年務めた。東京に移住し、業界紙や出版社などで勤務。95年の米ニューヨークへの旅行をきっかけに、牧師になることを決意し、日本聖書神学校(東京)に入学。2004年に卒業し、日本基督教団の牧師として新宿2丁目かいわいに「新宿コミュニティ教会」を開き、18年まで多くの性的少数者の相談に乗ってきた。08年にはパートナーとの結婚式も挙げた。教会を解散後は「宗教とLG B Tネットワーク」を設立し、学校や自治体などで講演活動をしている。現在は代々木上原教会(東京)の主任牧師。著書に「いのちの水」など。

中村さんに初めて会ったのは二〇一七年、日本最大の性的マイノリティの祭典「東京レインボープライド」で。数分の立ち話だったが、先月に取材を申し込んだ時は、当時を鮮明に覚えてくれた。

インタビューを終えて

聞いてあげることが大事」と親身になって受け入れてきた中村さんならではの活動には多くの偏見があったが、世間の当事者に対する理解は確実に深まっている。中村さんが二十年近く自らの「使命」として奉仕してきた歩みと、長きにわたる活動に「光」が差し込んでいる。

私が聖書を通して伝えたいことは命そのものです。私は、全身を動かさないALS(筋萎縮性側索硬化症)患者の嘱託殺人事件や、ブラック・リイプス・マター(BLM)運動といった黒人差別の問題などもテーマにしています。聖書は概略だけを教えれば古典の授業かもしれませんが、そうした問題に直面した時に「命は平等で、消えていい命などない」と生き方を教えてくれる書物でもあるのです。